

昔むかし、あるところに、とつても怠け者の娘がいました。おかあさんが、いくら糸をつむぐようにいっても、いっこうに働こうとしないで、遊んでばかりいました。

とうとう、あるとき、おかあさんは、なまくら娘をしっかりとつけて、ぶったたきました。

娘は、わあわあ泣きさけびました。

ちようどそこへ、王さまが通りかかりました。

「どうして、娘さんを、そんなに、たたいているのかね」

おかあさんは、ちよつと考えてからこういいました。

「いえね、この子は糸をつむぐのが大好きで、ベッドのわらまでつむいじやったんですよ」

王さまは、

「それはけつこうなことじゃないか。よかったら、わたしの城に連れて行こう」といいました。おかあさんは大喜びで、行かせることにしました。

王さまは、娘を馬に乗せて、お城に帰って行きました。そして、娘を、麻のたばのいっばいつまった部屋に連れて行っていいました。

「これをみんなつむいでいいんだよ。もし一年と一日たつてつむぎ終わっていたら、結婚しよう」

王さまは、そういうと、娘を部屋に残して出て行きました。

「これをみんなつむぐなんて、そんなめんどうなこと、できやしないわ」

娘は泣き出しました。

すると、とつぜん、目の前に、背丈は大人のひざぐらいで、鼻の長さは大人のうでほどもある小人があらわれました。

「どうして、そんなに泣いているんだい、きれいな娘さん」

「王さまが、この麻のたばを、ぜんぶつむぐようになっていうのよ」

「そうかい。じゃあ、一年と一日たつた日に、おれさまの名前をいうつて約束するなら、今すぐつむいでやるよ。おれさまは、リカベール・リカボン。リカベールが名前さ。名前をいえなかつたら、あんたはおれさまのものになる」

「リカベール・リカボンね。わかったわ」

娘が約束すると、小人は杖をふつて、麻のたばを打ちました。たちまちみんなつむがれて、糸になりました。小人は、行ってしまいました。

そこへ、王さまがやって来て、仕上がった糸を見て、おどろいていいました。

「では、今すぐ結婚しよう」

こうして、娘は、王さまのお妃になりました。

時がたち、約束の日が近づいてきました。お妃は、日に日に、悲しくなってきました。小人の名前をわすれてしまったのです。いくら考えてもわかりません。こまりはてて、

食べ物ものどを通らなくなりました。

ある日、王さまの狩人が、森の中で道に迷いました。真夜中になって、大きなたき火を見つけました。近づくと、たき火にかけた釜のまわりで、鼻の長い小人が歌いながらおどっていました。それは、こんな歌でした。

おれさまの名前はリカベール・リカボン

リカベールが名前さ

きれいなあの娘が覚えてりや

なんにも心配ないけれど

覚えてっこないもん

あの娘はおれさまのもんさ

狩人は、お城に帰りつくと、森の中で見たことをみんなに話しました。お妃は、それを聞いて、狩人を呼び、もう一度話をさせました。お妃は、どんなに喜んだことでしょうか。

つぎの日は、ちょうど一年と一日がたつ日でした。夜になると、小人がやって来ました。

「さあ、おれさまの名前は？」

「おまえの名前は、リベール・リボン？」

「いいや。さあ、おれさまといっしよに来るんだ」

「じゃあ、おまえの名前は、リール・リンボン？」

「いいや。さあ、いっしよに來い」

お妃は大きな声でいいました。

「リカベール・リカボン。リカベールがおまえの名前」

小人はかんかん腹を立てていきました。

「くそっ。おれさまに、炎とともに消えてほしいか。それとも、けむりとともに消えて

ほしいか」

「けむりとともに」

お妃がそういったとたん、小人は大きなおならをして出て行きました。それからの三日間というもの、国じゅうがひどくくさかったということです。

おしまい